

光緒十六年の国産鴉片の課税問題に対する各省の対応

目 黒 克 彦

(史学教室)

一 は じ め に

第二次鴉片戦争の結果、咸豐八年（一八五八）に締結された天津条約に基づいて交わされた「中英通商章程」において、インド鴉片は「洋薬」と呼称を改め、輸入が合法化された事は、必然的に中国国内における罂粟栽培・鴉片生産も解禁された事を意味する。しかし同治四年（一八六五）の山西巡撫沈桂芬の奏請により、全国に対して罂粟栽培の禁止令が頒布され、再び国産鴉片¹⁾土薬の生産は禁止される事となった。しかしながら禁令にも拘らず、中国の国内各地で罂粟栽培は継続拡大し、沈桂芬の警告は光緒三・四年（一八七七・七八）の山西省を中心とする旱魃による大量の餓死者の出現となって現実化し、改めて禁令の徹底が叫ばれた²⁾。しかし栽培地域が一般に生産性の低い丘陵・瘠地であり、穀物栽培を遙かに上回る収益を獲得し得る罂粟栽培に依存する農民・彼らを収奪する地主・商業資本の存在、更に違法な栽培を見逃し課税する事によって地方財政を補い、或は自肥を図る地方官の存在により、罂粟栽培は増大する事は有っても、減少することは無かった。

時あたかも太平天国の乱を平定し、最初の近代化運動としての洋務運動の展開による財政需要の増加、更にイリ問題（一八八〇）や清仏戦争（一八八四）等の外交・軍事問題による出費の増大は、一

層清朝財政を窮迫に追い込んでいた。その財政立て直しの一つの手段として、一方では光緒十一年（一八八五）にイギリスとの間でインド鴉片の輸入に対する「税厘併徴」方式を協定し、厘金の増額と密輸・脱税の防止により税収の増加を図った³⁾。他方で禁令下で事実上野放しになっている土薬に対して、これをしっかり把握し課税すべきであるという奏請が為され、罂粟栽培は再び合法化される事となる。

小稿は光緒十六年（一八九〇）の罂粟栽培の解禁前に、各省が現実に流通している土薬に対して如何に対応しており、この合法化により、どの様に対処したかを、検証する事を目的とする。

二 土薬解禁前の解禁を巡る論議

洋薬の輸入に関して、前述の光緒十一年の「税厘併徴」方式を協定した「煙台条約続増専条」では、その第五条において、洋薬に対する課税について、

中国國家はこれらの貨包洋薬を行銷する地方に在つて開拆するを許すべし。如し納むべき税捐等の項は、或いは當時の徴する所、或いは日後設ける所、或いは明収により、或いは暗収によること有るも、均しく土煙の納める所の税捐等の項に較べ、格外に加増するを得ず。……³⁾

と規定し、後日或いは中国で実施されると予期される土葉に対する課税額が洋葉に対するそれに比較して、格段に軽減されてはならないとしている。ここには既にイギリスは、現地中国政府が公的に土葉の生産・課税を禁止しているが、いずれ実状を認知し、解禁する事となると考え、その際に課税額に大きな差が生じ、洋葉が排斥される事態に至る事を防止しようとする意図が見られる。イギリス、特にこの間の交渉に従事した駐華公使 Thomas Wade は、李鴻章との交渉の過程でこの事を予見したと思われる。この洋葉に対する「税厘併徴」問題を巡る交渉において、税厘関税は咸豐八年の「中英通商章程」に規定された毎百斤銀三十兩を変更せず、国内で中国が徴収する厘金の額を巡って紛糾した。光緒七年（一八八一）、当時軍機大臣・總理衙門大臣であった左宗棠は、厘金を百二十兩とし、税厘合計百五十兩とすべきであると主張した。その際は禁令に拘らず現に流通している土葉について、次の様に述べている。

若し内地罌粟を私種し、造る所の土煙、行銷浸広すれば、応に即ちに洋葉税則に照らし、捐を加え罰を示すべし。惟だ土煙の味淡く氣薄く、吸う者はその価値を尚ばず。亦洋葉に較べて輕しと爲し、税厘の加は未だ洋葉と一律にすべからず。……近頃市価日に減じ、吸う者は日に多く、患を爲すこと亦愈々積み、愈々甚だし。ここにおいて禁制の方を思うに、実に洋葉土煙の税捐を加えるに非れば不可なり。それ税捐を加えるを議する所以は、僅かに聚斂豊財の起見たるに非るなり。⁽⁴⁾

即ち、不法に流通する土葉に対して、言わば罰金の意味で課税すべきであるが、その額は品質の相違により、洋葉と同等の額を課すべきではないとしている。左宗棠の場合、土葉の嚴禁策を維持しつつ、不法に流通するものに対して、罰金を徴収するが、それは財政収入

の増加のみを意図するものでは無いと強調している。

これに対して直隸總督李鴻章は、左宗棠の主張に対する見解を述べた上奏の中で、当時の天津における土葉の状況を報告している⁽⁵⁾。天津に出回る土葉の量は多くはなく、従って税厘の徴収額も少なく、年に一二百兩から三四百兩であると言う。従って既に不法に流通している土葉に対して、税厘を徴収していた事が知られる。天津に流通する土葉は、山西産が最高で、毎百觔三四百兩の販売価格であり、次いで山東・河南・奉天産で三百兩前後、次に四川産が百余兩であると言う。この価格差に従い課税額に差を設ければ、混乱・弊害をもたらすので、産地を問わず、洋葉の内地における税厘に照らして「減成徴収」すべきであるとしている。具体的には洋葉に対する税厘額を百二十兩と仮定し、その三分の一の四十兩とする事を提案している。その理由として、土葉には輸入関税が無く、携帯・流通が容易であり、課税額が高ければ脱税が横行する事、更に土葉の毒性が洋葉に比べて少ない為としている。そして将来収益の減少により、洋葉が輸入されなくなった時点で、土葉に対する課税を強化し禁止に向かわせるとしている。李鴻章の場合に、左宗棠の言に見られる罰金としての意味は無く、当面はその実状を認め、これを公認し課税の対象とし、禁止を将来の課題としている。

一方両江總督劉坤一は、この年七月の上奏において、土葉の問題について、次の様に述べている。

土葉に至っては、上海向に洋葉に照らし減半收税す。然るに川土・台土多くは江漢閩・浙海關より運來し、再びは完税せず、祇だ能く捐を取めるのみ。その各省より來る所の土煙は、皆華人により零星携帯し、従りて成箱成担無く、稽察頗る難なり。江南北の各捐局は章程一ならず、而して収数は総て寥寥に属す。且つこ

これらの土煙は内地の出産にして、多くは内地に在って銷売し、各関を經過す須き無し。又質軽く帶するに易きに因り、繞越防ぎ難し。各々出産の地により洋薬に照らし、減半徴収するに如かず。

各関に較べ稍や稽徴に把握有るに似たり。この項の土煙は洋商の弊を作す無く、洋官の阻撓無し。寛嚴は惟だその操縦に宜しき所、以て自主すべく、洋薬加厘の事定まるを俟ち、再び各省により当地の情形を体察し、斟酌辨し、以て妥善を期すべし。⁽⁶⁾

即ち、上海に流通する土薬について、従来洋薬の半額を課税するとしていたが、多くは四川産・台湾産が江漢関・浙海関を経由して流通しており、これらに対して捐税を徴収しているが、把握は困難で徴収額も少ないという現状を述べ、土薬に対する課徴は中国の自主的判断により、洋薬に関する厘金増額が協定された後に、各省の事情によって処理すべきであるとして、基本的に洋薬の半額の課徴を是認する考えを示している。

以上の洋薬に対する「税厘併徴」問題に関連して為された、土薬に対する課徴問題に関する議論は、結局この時点では実現しなかった。それは一方で罂粟栽培の解禁につながる課徴策に対する根強い反対論が存在しており、公然と罂粟栽培を認め、鴉片の生産・流通・販売に対して課徴する事に対する躊躇が有った為と考えられる。例えばこの光緒七年に山西巡撫に就任した張之洞は、翌年六月に「禁種鴉片」を提出し、罂粟栽培を禁止すべき理由を、食糧生産の減少による災害時の飢餓発生、鴉片吸飲者の増加による生産力の減退、洋薬流入の一層の増大につながる等の点を挙げて、禁止の徹底を主張している⁽⁷⁾。新村容子は当時の清朝政府の土薬に対する政策について、「アヘン生産は穀物生産を損うという『農本主義』的伝統に立つ禁止論の存在に配慮しつつ、理念としてのアヘン生産禁止を保つ

と同時に、『漏卮』を塞ぐためにはアヘン生産は必要であるとする議論に支持されつつ、アヘン生産を事実上容認した」と結論付けた⁽⁸⁾。土薬禁止の政策は洋薬の「税厘併徴」方式の確立の際に、以上の議論に見られる様に、大きな動揺を示したが、原則禁止、事実上容認という極めて曖昧な形で決着をつけたものと思われる。「大清実録」には、光緒十二年四月に、山西巡撫剛毅の罂粟への課税を要請する上奏を掲載している。即ち、

擬すらくは、栽種の州県において、揚花の時に於いて、種える所の地畝を查明し、成熟百斤なれば、税銀二十二両を抽し、仍お落地行銷の処所において、外来土薬章程に照らし、再び厘銀二十二両を抽す。試辦すること一年、酌量して通加すと。所司に下して議せしむ。⁽⁹⁾

と述べ、山西において罂粟の開花時に栽培面積を調査し、收穫された鴉片について、百斤当たり税銀二十二両を徴収し、流通・販売の時点で厘金二十二両を徴収する事、一年試行の後、増額する事を要請し、戸部で検討する事としている。ここに既に「外来土薬章程」なる規定が存在していた様であり、この要請がどう処理されたのか、詳細は現在の所明らかでない。

三 土薬合法化の上諭

光緒十年の清仏戦争や、それに対応して建設が急がれた海軍創設の為に、多額の資金を必要とした清朝政府は、「開源節流二十四条」等による調達を行うという状況に在った⁽¹⁰⁾。こうした資金調達策の一環として、前述の洋薬に対する「税厘併徴」政策が実施に移されると共に、土薬に対する公認と課徴の実施が指示される事となった。

光緒十六年（一八九〇）四月十五日、総理衙門・戸部の上奏を承

けて、上論が下された¹¹⁾。そこでは冒頭に、「内地土薬の栽種するは、中国産の大宗為り」と述べ、国内の土薬生産が中国の主要な産物となっていると言明し、従来これに対する課税を検討したが、問題が多いとして見送られて来た事、現実には各省では生産が為され、それに対する課税も行われているが、それらは「官吏隠匿して己に入れ」、国庫に寄与する事が無いという状況を指摘し、

若し時に及んで整頓せざれば、洋薬の併徴辦法において、大いに困難有り、税数必ず日に細ならんとすれば、何を以て覈実を昭かにし、饒源を裕かにせんや。

と述べ、こうした状況の放置は、洋薬に対する「税厘併徴」政策の実施にも障害をもたらすとする。そこで各省將軍・督撫に命じて、管内の土薬生産・流通・販売の実状と、これに対する従前の課徴の実態の調査を行い、今後の課徴方法の立案・報告を指示した。調査の正確を期する為に、

その従前匿報せる員は、咎の得べき有るも、朝廷姑く寛典に従い、既往を追はず、著して一併にその参処を免す。

として、既往の隠匿等の罪の免除を伝えている。更にこの上論には、海関総稅務司 Robert Hart の調査になる各省の土薬の生産・流通・課徴の数目が参考資料として付けられた。このハートの調査内容が如何なるものか、彼は何を主張したのか、今は不明であり、後考を待ちたい。

かくして發布された上論に対して、各省がどの様に調査・覆奏したのか、現在知り得る省について、以下検討を進める。但し当時の有力な土薬の生産地であった江蘇の徐州府下と四川の状況については、別稿で詳述する事¹²⁾として、ここでは、广西・陝西・湖北・直隸の状況を中心に見る事とする。

四 各省の実状と対応

(一) 広 西 省

广西巡撫馬丕瑤は、この年七月十六日に最初の覆奏を提出している¹³⁾。先ず土薬の生産については、「广西既に土薬を出産せず」と記し、罂粟栽培は為されておらず、従って栽培農民に対する「就地徵収」は問題にならない。では他省の土薬の移入についてはどうであろうか。

近年川貴の土薬、来る者日にその少なきを見、雲南の土薬は亦多く蒙自の一路より銷販す。毎年雲南より来る者を計るに、多ければ則ち七八百担、少なければ則ち三四百担にして、川貴より来る者は多ければ三四百担、少なければ則ち一二百担なり。

即ち雲南産が最も多く流入し、四川・貴州産がこれに次いでいる。これに対する課徴は、従来百貨厘金の一種として為され、その額も画一では無かったが、光緒七年に前述の左宗棠の洋薬に税厘合計百五十兩徴収の案による上論に基づき、当時の巡撫慶裕が、土薬についてはその八割を徴収する事とし、四十兩を税、八十兩を厘金とし、合計百二十兩の徴収を図ったという。しかし

广西の售販は毎に百貨を以て互貿す。税厘陡かに重く、風を聞きて觀望し、試辨数月、種種窒滯し、特に土薬税厘収無きのみならず、百貨厘金においても亦困難有り、旋いで議して土薬税厘は每百觔改めて銀十兩を収め、歷年款を分けて列報して在案せり。とある様に、余りの高額の為に流通が滞り、一般物資の流通にも影響した為、僅か数月で十兩に大幅に減額したと言う。そして

過境の土薬に抽取するに在っては、厳しく走漏を査し、私収を禁絶し、私販の弊は經に歷任撫臣隨時釐剔し、法を設け勾稽し、

己に歎隠少なし。臣到任の後、司道を督同し密かに察訪を加え、各局卡の官吏巡役、層層箝制し、実徵実報し、尚お隠匿して己に入れ、包庇分肥するの各情事無し。

と、徴収に当たる官吏等の不正の存在を否定し、全額を送金しており、その額は、

顧みるに光緒八年より起り、毎年収める所の厘金は、専款報部し、多きは八九千両、少なきも或いは五六千両なり。

と、その実績を報告している。

次に今後の徴収の在り方について、ハートの参考資料の「沿途徴収の各数」を参考にして述べている。

広州税務司の詳報に拠るに、四川土薬は毎百觔銀十二両を徴収すと。茲に比照辦理するを擬し、嗣後広西は土薬百觔毎に、共に過境税厘銀十二両を収め、四両を以て税と作し、八両を以て厘と作し、分別して列報し、入境の首站により抽収の後、印花を黏貼し、その往く所に随う。如し他局査して印花無ければ、即ち加倍徴収す。

とあり、従前の十両を十二両に増額し、納入済みの印花を貼付する事とし、最後に真剣な取締による脱税の防止に努める事を誓っている。これに対して戸部・総理衙門は、これを妥当として了承している¹⁴⁾。

広西巡撫馬丕瑤は翌年八月に、戸部の「庫款支絀、酌擬籌餉辦法」の上奏に基づく、「外辦四条」の検討が指示され、その中の土薬税厘に関して、「徐州土薬章程」¹⁵⁾により、徴収した土薬厘金の内より、一割を控除し徴収の経費に充てる事を認める件について、広西の対応に関する問い合わせに答え、広西の場合、従来より税厘一両を徴収する毎に外捐公費銀八分を徴収し経費に充てており、これを継続

する旨の覆奏を行っている¹⁶⁾。

(二) 陝 西 省

陝西省からは光緒十六年九月十六日に、陝西巡撫鹿傳霖により覆奏が為されている¹⁷⁾。この地域での罂粟栽培について、

第だ該省の土薬の出産は、本より多く無きに属し、加えるに歴任の前督撫臣及び臣は先後嚴禁し、種植尤も希なり。現に復た委員地方官を会同し、詳細査明するに、南北二山及び高亢の区、種える者は絶少なり。惟だ渭河に浜臨する一帯は、民間嗜食する者較や多く、偷種自食し、その余を以てこれを售り、商販他処に運売するを免れざるなり。

と記し、渭水一帯で栽培が為され、自家消費の余剰分が商人により他の地方に販売されていると言う。これに対する従来の対応は、

陝省の土薬税厘は、向に各厘卡により、章に按じて抽収す。近年隨時整頓嚴査し、毎歲約そ銀二万両左右を収め、歷經造報して案に有り。私収匿報を査するに、尚おこの弊無し。

と述べ、流通する土薬に対して、通過する厘卡において、章程に照らし厘金を徴収し、年間約二万両前後を徴収しているとし、栽培農民に対する課徴は行っていない様である。今回の上論に対する対応として、「就地徴収」は「査驗」に容易であるとし、

今擬すらくは、種煙の地畝は、正賦差徭は旧に照らし完納せしむを除く外、川原平地は毎畝煙税銀一銭を加収し、山坡の地は毎畝税銀六分を加え、種えるを願はざる者は徴せず、悉くその便を聴す。若し運售して他出すれば、則ち貨は商販に帰し、再び厘卡により仍お章に按じて抽収し、並に走漏私収を嚴禁し、以て周密にして公款に益するを期す。

とある様に、正規の地丁税の外に、罂粟栽培の土地については、平

地については毎畝銀一錢、山地については毎畝六分を徴収し、その土薬が商人の手に渡り流通する時に、各厘卡において定章の厘金を徴収する事としている。この栽培面積に應じて徴収する事について、先に調査に容易であると述べていると共に、

かくの如く畝に按じて稽徴すれば、収数或いは稍や多かる可く、並に以って朝廷の徴を以って禁と為し、崇本抑末の意を仰体す。特だ恐らくは小民利を貪り、相率いて広種し、転じて嘉禾を不務に置き、民食に大いに妨礙有らん。仍お宜しく示すに限制を以つてし、擬すらくは地十成有れば、種煙は二成を過ぎるを得ざらしめ、限を逾える者有れば、仍お翻犁して雜糧に改種せしむれば、土薬を整頓する中に、仍お民食に慎重なる道を失はざらん。

と述べ、徴収額の増額が望めるが、栽培の拡大の懸念が有るとし、所有地の二割に制限し、これを越えた土地は雜穀に改めさせるとしている。果たして罌粟栽培面積の調査把握が、鹿伝霖の言う様に容易な事か、特に農民の所有地の二割に制限するという方法は、一層その事務を繁雜にし、確実な実施が危ぶまれる事である。こうした栽培面積による農民よりの徴収方法を採用する省は、この外に福建省が有り、ここでは平地・山地を問わず、毎畝銀三錢八分五厘とし、陝西に比べて遙かに高額を課している⁽¹⁸⁾。

この方法に対する戸部等の見解は、福建に対するコメントも同文であるが、

現に試辨一年を擬し、如し果たして煩擾して民を病めば、即ちに奏明し別に辨法を籌れ。⁽¹⁹⁾
と記して懸念を示し、一年の試行の結果を見て、或いは変更も考える様に指示している。

更に移入の土薬に対する課徴について、戸部等の見解は、

又原擬の貨は商販に帰すれば、再び章に按じて抽収すは、その章の若何、未だ経に明叙せず。応に奏到るを俟つて再び核せん。それ販運して陝に至る者は、每百斤閩省の辨法に照らし、銀三十両を徴し、本産販運して他省に至れば、到る所の省分の章程に照らし、収税すること一次にして、再びは重征せざるなり。⁽²⁰⁾
とあり、移入土薬に対する厘金の徴収額は、福建の事例に倣い、每百斤三十五両とし、移出については、当該省の章程に従つて納入し、二重徴収は行わない様にすべきであるとしている。

この問題について鹿伝霖は光緒十七年九月十日の厘稅局・司道等の報告による上奏⁽²¹⁾で、一年の試行の状況について、農民よりの「就地按畝徴収」は、徴収額が少ない為、農民は安心して交納しており、何の擾累も無いと報告すると共に、移出土薬に対する厘金について、その商販の厘金を徴収するは、陝省向に定章に照らし、每百觔厘銀三十両を収め、如し行商販運して出境すれば、再び捐輸銀二十両を収む。現に仍お旧に照らし辨理す。

と述べ、農民より土薬を購入する商人より厘金として、每百觔三十両を徴収し、これを他省に移出する場合は、更に「捐輸」として銀二十両を徴収していると説明している。所が新たな規定では、先の戸部等の見解に有る様に、移出土薬については、受け入れ側の省の章程により納入する事となっている。この点について鹿伝霖は、

惟だ新章は外省に行銷すれば、再び到る所の各省章程を按じ、銀三四十両不等を完す。陝西土薬は質低く低廉にして、成本は川土と相埒し。完すべき厘稅数目を通計し、これを現に議する川土の鄂省に行銷するに、每百觔三次にて銀六十両を完し、及び直隸・山東等省の土薬は、每百觔三次にて厘稅銀六十両を交足し、即ち重抽せざるの部章に較ぶれば、均しく増多に属す。且つ捐輸の一

項は、各省俱に未だ拏辨せざるなり。

と述べており、四川土薬の湖北への移出には、三回にわたって合計六十四両を徴収し、直隸・山東のそれも他省に移出する際に、六十両を徴収するという部章と比較すれば、陝西の土薬は質的に劣っており、元手は四川と同じであるにも拘らず、本省での三十両及び捐輸銀二十両に加え、移出先の省で三四十両余の徴収が為されれば、当然陝西土薬は販路を失い、商人も脱税或いは購入を回避する事となるとして、

宜しく量りて捐輸を將つて裁減し、以つて抽取過重にして、転じて奸商の偷漏を啓くを免れるべし。

と述べて、捐輸を廃止するとし、陝西に移入する他省の土薬に対する処置については、戸部等の見解にある三十五両に従うとしている。陝西における他省の土薬の移入について見ると、境界を接する湖北・河南・山西・甘肅・四川五省の内、湖北は土薬を産出せず、河南・山西産は「東南の繁庶の区」に移出され、移出が有つても「辺牆一帯」に向かい、陝西に入るのは極めて「寥寥」たるものであると言ふ。四川は産量が多いが、境界を接する陝西・新疆へは輸送が困難な為に、河運により湖北へ向かい、為に陝西の厘卡で徴収される四川土薬に対する厘金は、決して多くは無いと言ふ。以上の報告から見れば、陝西省は基本的には土薬の自給自足地域であつたと見る事が出来よう。

陝西省の場合、光緒十七年分の土薬厘金の徴収実績を示す史料が有るので紹介する。

即ち、巡撫鹿伝霖の光緒十八年六月五日付の上奏に拠れば、

収める所の百貨厘金は、前に較べ略減を形し、實に来源稀少・銷路滯塞に因ると雖も、而して土薬厘金は前に比べ略は加増を見

る。百貨土薬両項を合計するに、収める所の厘金は、無閏の年に較べ、盈有るも絀無し。⁽²²⁾

と記し、土薬厘金の増収を伝えている。具体例として、四川土薬が陝西に移入する際に、必ず經由する紫陽県の任河地方に厘卡を設置し、厘金徴収を行い、その結果土薬厘金は五万二千三百九十三兩零であり、前年より一万三千四百四十兩零の増収となつたとし、又土薬捐輸銀六千四百兩の収入を記載しており、ここでは土薬捐輸は廃止されずに継続して徴収されている様である。これらの税収の内、部議に照らし「留外辦公並に局卡經費」として、一割五分を控除し、余は布政使庫に送られ保管し、「饌需」に備えていると伝えている。

(三) 湖北省

湖北省の状況については、光緒十六年八月二十四日に、湖広総督張之洞が報告している²³⁾。彼は先ず湖北における土薬に対する厘金徴収の経緯について述べている。即ち咸豐九年（一八五九）に戸部の奏案に照らし厘金を税と改め、宜昌の平善壩・襄陽の老河口・荊州の沙市に局を設置し、洋薬の科則に照らし、毎百斤税銀三十兩を徴収したが、後に老河口分局を樊城に移した。土薬税の納入後は、省内では納税証明書である票を所持しておれば、そのまま流通が許されるが、販売の際に落地厘金として毎兩錢九文を徴収するという事であつた。

湖北は前述の如く土薬の産出地区では無かつたが、近年宜昌・施南・鄖陽等府の山間で、間々栽培が為されていると言ふ。しかし量的には多く無いと伝え、一定の生産が為されていた事が解る。

湖北に移入される土薬は四川産が主要であり、雲南・貴州・陝西・甘肅の土薬も移入され、漢口・沙市等が集まるが、その前の段階で平善壩・沙市・樊城で徴税が為される。宜昌・施南等の土薬もこの

局において同様に納税し、盛んな年には七八万両の徴収が為されたが、その後漸減して三四万両になったと言う。又光緒十三年に巴東県の野三関に局を設置して徴税を開始し、沙市は補助的徴収機関に改めた事により、やや徴収額を回復し、十五年には七万余両を徴収したと述べている。以上が従前の湖北における土薬の流通状況と課徴の状況である。ここでも光緒十六年の解禁前において、四川土薬を中心に、多い年で二十三万から二十六万余斤の土薬が流通していた事が知られる。

光緒十三年の改善前の税収減について、その原因は「私收入己の情弊」に有るのではなく、

皆この項の土薬の商販は、多く刁悍不逞の徒に係り、挑夫百十羣を為し、専ら挾制闖越を以て事と為すによる。而して山径紛岐し、防ぐも防ぐに勝えざるなり。

と述べ、鴉片商人集団による暴力的税脱行為の為であると言う。この脱税取締の問題について、次の様に記している。

各局卡は多くは荒僻の区に設け、止だ巡丁一二百人有るのみ。自ずから力を揣るに敵せざる有り。その肯えて該卡従り経過する者は、その抗拒し生事するを恐れ、含糊に忍讓し減折せざるを得ず、抽収愈よ趨り愈よ下る。その山箐岐路を繞越する者は、亦敢えて認真査緝せず、以て銷日に多くして、税日に少なきを致す。薬税の愈よ細なるは、実にこれに由る。

即ち、局卡を通過する者に対しても、その勢力に圧倒され、税額を割り引いて通過を認めざるを得ず、又間道を通行し脱税を図る者への取締も真剣に為されない為に、徴収額の日々の減少を招いたと述べている。

かかる状況に対して、張之洞が光緒十五年七月に湖広総督に着任

の後、巡撫奎斌と共に整頓に乗り出した時に、中央から土薬への正式の課税の上諭が發布された為、これを期に積弊を一掃したいとしている。

先ず上諭に付随して示されたロバート・ハートの主張としての、土薬に対して百斤につき、洋薬税厘に照らし百十兩を徴収すべきであるという議論に対して、張之洞も土薬が洋薬に比べて品質が劣る事、洋薬は入港の海関で一度だけ税厘を納入するが、土薬は販路が遠く、流通の時点で厘税が加わる為、その課徴額が高ければ、取引が停滞し、脱税が巧妙になり、増税も有名無実になる恐れが有り、利権回収にはつながらないであろうと、反対の意志を表明している。その上で今回の中央からの指示について、司道・牙厘局に命じて詳細に検討させた。その結果に拠れば、前述の通り、湖北の土薬に対する税収の減少の原因は、税額が低い為ではなく、脱税や割引が多い為であるとし、従来の毎百斤税銀三十兩は「折衷至当」の額であり、これを更に増額すれば、商人の営業が困難になるとし、

この時に到り、惟だ部章を恪遵し、百斤毎に十成足数銀三十兩を実収し、耗銀四兩七錢を随征すること有るのみ。絲毫も減折を准さず、亦稍も浮収有るを准さず、実力稽征し、厳しく偷漏を杜さば、国課・商情において両つながら妨礙無きに庶からん。と記し、従来からの毎百斤三十兩の税と、耗銀として四兩七錢を徴収し、これまでの減額や脱税を許さず、厳しく取り締まるとしている。

次に今後の土薬に対する課税の体制について報告している。湖北南路については、移入土薬の主流を占める四川土薬に対して、宜昌・施南一帯が水陸の要衝であり、ここに文武大員を配置し、徴収・取締を強化する必要がある。為に宜昌に土薬専局を設置し、湖北候補

道の吳廷華を派遣して局務を総理させる。野三関・平善壩と新設の来鳳・西関を分卡とする。沙市は野三関と来鳳の税票を検査し、漏税を追徴する分卡とする。各局卡で徴収された税は宜昌の専局に集中する。北路は四川の大寧、陝西の漢中から鄖陽府属の竹山・竹谿・房県・保康等の地に輸送されるが、「山径紛岐、四通八達」の状況であり、又襄陽・樊城一帯も同様であり、商人は集団で脱税を図り、司事や巡丁では弾圧不可能である。営勇も湖北の定員は少なく、緑営は既に削減され、残存の部隊も「習疲」の状態で、又各々任務があり、彼らを取締に動員する事も出来ず、又成果を期待し難いと言う。しかし署宜昌鎮總兵の羅縉紳なる人物は、有能実直であり、久しく宜昌の任に在り、四川・湖北境界地方の状況に詳しく、軍民も信服しているので、道員吳廷華と共に、この問題进行处理させる事とし、宜昌・施南地方の山中の間道を調査し、又取締の巡勇を募集し、分担して巡回取締に当たらせ、北路の襄陽・樊城一帯も同様に人員を派遣して調査させた結果、

南北両路を合計するに、隘卡は二十余処、延袤一千七八百里にして、南路は約そ緝私の巡勇三百余名を需め、北路は約そ二百余名を需め、始めて以って彈圧・截緝の用に資す。この項の巡勇は、土薬の私販を杜絶する為に設けるに係り、需める所の経費は、応に即ち土薬税の項下に在って開支し、地に就きて材を取り、以って別に撥款を行うを免れるべし。この条は薬税を整頓するの根に係り、断じて省くべからず。

と記し、五百余名を配置して、徴収と取締に当たらせ、その必要経費は土薬税内より支出すべきであると言う。

こうした手配を行った上で、七月十八日に宜昌専局は業務を開始し、商人達は今回の措置が「特旨飭辦の件」であり、且つ文武大員

を派遣し、各路の分卡には巡勇が配置されている事を知り、章程を遵守し納税を行っている様であるが、更に委員の功過を嚴重に調べ不正の防止に努力していると述べている。

更に張之洞は、土薬に対する落地厘金について言及し、

土薬の落地厘金に至っては、数を為すこと限り有り、税項と両事に属するに係り、向來兩を按じて抽収す。これを行うこと既に久しく、毫も弊竇無く、自ずから旧に照らし辨理す可し。

と記して、前述の毎兩錢九文の落地厘金の徴収には、如何なる弊害も無いので、従来通りにし徴収したいとしている。

最後に彼は土薬の流通範囲は甚だ広範囲であり、隣省との通力合作により、一層の実効を得られるとして、湖南、河南、江西・安徽各省と協調すべき旨を要請し、硃批は「該衙門知道せよ」と記されている。

以上の湖北省の報告に対する戸部・總理衙門の見解は、每百斤税銀三十兩、新加耗銀四兩七錢、落地厘金は土薬一兩毎に錢九文という課徴額を妥当としつつ、土薬を産出しないとされる熱河・安徽・江西・広東・広西を含めた六地域について、

該六処の擬する所の数目は、固より未だ画一ならず。惟だ既に声称に拠るに、各該処素とより出産無く、征する所の税厘は、皆外来の販運に係り、且つ向章これを行うこと已に久しきに属するに係る。応に暫く擬する所の如く、辨理するを請うべし。⁽²⁴⁾

と記し、その立案通りの実施の裁可を要請している。

(四) 直 隸 省

直隸總督李鴻章は光緒十六年十二月十七日に覆奏を提出した⁽²⁵⁾。彼は先ず「按畝徵収」の実施は不便が多いとし、三点の理由を挙げている。一は罌粟栽培が一定の土地で恒常的⁽²⁶⁾で為される訳ではなく、

その調査が極めて困難である事、二は生産量も年により異なり、実地調査を必要とし、その際に官吏による不正行為や民の密告の風潮を醸しやすい事、三に農民に対してその生産物へ課徴せず、栽培の土地について課徴すれば、農民は加賦と誤解し、官も自己の勤務評定を畏れ、実態と異なる課徴を行い易いとしている。具体的に光緒十二年に蠡県・藁城で「按畝收捐」により「聚衆抗違」事件が起こり、山西でも重案を醸成した事を挙げて、「この畝税の一事は、実に窒礙行い難きに属す」と反対の意志を表明している。

その上で自己の見解として、

今惟うに地に就きて落地税を徴収し、過境に及び税厘を徴収する有り。両法は博く衆論を採り、全局を統籌すれば、尚お行う可きに属す。

と述べ、現地での落地税と他省に移出される際の税厘徴収を行うべきであるとする。彼は土葉への徴収は「国家の已むを得ざる挙」であり、「擾民」しない事を主とし、税収の多寡は次位とすべく、その為には軽税が望ましいが、洋葉との関係で、

若し洋葉より軽くすれば、恐らく彼藉りて口実と為さん。則ち土葉の税捐は、又洋葉と相等の勢いとせざるを得ず。

とし、更にロバート・ハートの総理衙門への申呈で、洋葉はインドにおいて毎百斤二百五十両を納め、中国に輸送して又税厘百十両を納めねばならないという発言と、中国土葉についても落地税百十両を徴収し、更に関税厘捐百十両、合計二百二十両を徴収すべきであるとする主張に反論し、洋葉に対して二度課徴するのは、外国への輸出の為であり、土葉は国産物を国内で流通・販売する為に、二度の課徴はすべきではなく、それは「専条」にも違反しないとしている。

ではどの様に課徴すべきか。彼は

惟だ査するに各省の土葉の価値は、毎百觔一百余両より、三百余両不等に至り、貨の高下懸殊し、価の低昂各々異なる。若し価の低昂を論せず、一例にその觔数を按じ、洋葉に比照し収税すれば、未だ偏枯を免れず、必ず估価定税し、方めて公允為るべし。

として、販売価格による課税を主張し、現在の洋葉の価格は毎百斤三百八十九両から四百八十九両であるが、折衷して四百四五十両とし、税厘百十両で計算すれば、百両につき二十四五両の税厘額となる為、土葉は価格百両につき二十四両の税厘を徴収すべきであると述べる。洋葉は関税・厘金が有るが、落地税は無いので、土葉は落地税八両、関税八両、厘金八両、合計二十四両とすれば、洋葉と大きな差は無く、異議の出る事も無いとしている。彼の場合、洋葉の「税厘併徴」問題の交渉に直接携わっている為に、洋葉との関連を強く意識し、イギリスから異議が出ない様に腐心している。

直隸における土葉の生産について、四川・雲南や東三省と異なり栽培は少ないが、寧河・豊潤・灤州・藁城・蠡県と大名・順徳府下の州県で間々栽培され、收穫と共に商人に売却されるが、その際には經紀が価格を評定し、官は関与せず、従って「絶えて官吏の税捐を私収し、隠入匿己の事無し」と不正の存在を否定している。

徴収の方法については、落地税は、官が「土葉官牙」を一名、或いは数名を募集し、土葉市場を一乃至数か所設置し、農民と商人の土葉売買はここで行い、官牙が「過秤評價」し、価格毎百両につき八両を落地税として買主より徴収し、「落地税印花」を貼付する。官牙は各種牙行の例に倣い、三分の手数料を売主より徴収し、官牙の取得とする。「落地税印花」の貼付された土葉は他州県に流通しても課税されないが、厘卡を通過する際に価格毎百両につき八両の厘捐

を納め、「厘局印花」を貼付し、これが有れば、以後他の厘卡での課徴は無い。しかし税関を通過する際には、更に価格毎百両につき八両の関税を完納し、「関税印花」を貼付する。以後はどこに流通しても課徴は為されない。これを実施する為に、省城に土薬総局を設置し、委員を配置して業務に専念させ、「印花」に使用する関防を作成し配備する事を要請している。これらの業務に要する経費に関しては、州県は落地税収の一割を控除し、余は総局に送り、総局はその税収の一割を経費とするとしている。

最後に試行の当初は、厘税の徴収額の予想は困難であるが、各州県で実施している牲畜・花布等への課税に比べ、落地税徴収は方法も簡易であり、商民にも便利であるから、真剣に処理すれば成果を得る事は出来ると述べて、期待の意を示している。

以上の李鴻章の立案の最大の特徴は、他省のそれが土薬の重量を単位に課徴するのに対して、価格について課徴する方法を主張している事である。これに対して総理衙門・戸部の見解は⁽²⁶⁾、

その章程は誠に簡明妥洽に属し、価に按じて納税するにしくは無し。則ち価値の低昂は、須からく臨時に估計すべく、恐らくは抑勒争論の弊を啓かん。預め折中して定価を為すに若かず。

と述べて、時価に応じての徴税は混乱を招き、税額を固定すべきであるととし、土薬毎百斤の価格二百五十両を基準とし、落地税二十両、厘卡での厘金二十両、税関での関税を二十両と明定すれば、査察の混乱も無く、計算も容易であり、又四川産土薬の税厘額とも符合すると述べ、この案で決定するが、この変更には李鴻章も賛成している。即ち彼が翌年正月二十七日に総理衙門に送った書簡の中で⁽²⁷⁾、ハートの主張する落地税・厘金・関税合計二百二十両を課すべきとする考えは、「土薬をして洋薬を冒充するを致さざらし」めんとする

ものであり、その洋薬・土薬の一律の増額は、最大の四川土薬の販路を妨げ、四川の民の生計に重大な影響を及ぼすとし、

土薬の価は一ならずとも雖も、酌中価を定めるを妨げず、每土薬百斤、内地税若干、出口税・復進口税各若干を完し、三項分徴し、価本に按照し核計す。税厘は総て洋薬併徴の数を過ぎるを得ざれば、華洋の商情において、較や允洽為り、亦併徴の條款と相違背せざるなり。

と述べており、最終的に直隸は山東と同様に、毎百斤価格二百五十両につき、落地税・厘金・関税を各二十両徴収する事とした。他の「印花」の貼付等の具体的方法は、全て李鴻章の立案を採用する事とした⁽²⁸⁾。

五 おわりに

以上四つの省の土薬に対する従来の課徴の在り方、及び公認された後の対応について、各省からの報告・立案の覆奏と、それに対する戸部・総理衙門の見解を中心に紹介した。この四省はその地理的・経済的条件の相違により、土薬に対する課徴の在り方は、決して一様では無い。しかし共通して言える事は、何れの省においても、既に解禁前においてその名目や額の相違は有っても、土薬の生産・流通・販売に対して課徴が行われており、公的に叫ばれていた罂粟栽培の禁令が、如何に有名無実のものであったかを如実に物語っている。又何れの省の報告においても、管内における現実の土薬に対する課徴において、その徴収に当たる官吏等の人員による不正行為は、全く存在していないとしている。これはその上論において指摘していた、

各該省の局卡税項を徴収するに、官吏隱匿して已に入れること、

数を為すこと甚だ鉅なり。弊端百出し、尽く私囊を飽かし、以つて多を徴し少を報ずるを致し、国課において毫も裨補する無く、含混欺飾し、実に痛恨に堪えん。⁽²⁹⁾

と批判する状況を全面的に否定するものであった。中央が実状の正確な把握を意図して行つた、既往の不正行為に対する弾劾・処分免除という恩典も、何ら顧慮されず、潔白の報告のみを見る事となつた。又次に示す様に、各省の税厘額は極めて多様で不統一であり、その事は納入する側も徴収する側も混乱し、従つてそこに不正行為の働き得る余地を残す事となると考えられる。

土薬解禁に関する上論に対する各省の覆奏について、その全てを見る事は出来るのは、現在の管見の範囲では、以上の四省と新疆・江蘇・四川省である。新疆は流通量も少なく、覆奏には具体的額等も記されていない。後二省は中国土薬の重要な産地とされ、この地域の土薬厘金課徴問題は別稿で論述する。最後に、これまでも引用した光緒十七年の戸部・総理衙門による、各省の覆奏を総括する上奏の、最後の部分に、省別に課徴額を列記しており、これを紹介する事とする⁽³⁰⁾。

奉天 每百斤 銀五十兩 移出の場合、当該省の章程により課徴し、以後の徴収は免除。
 山海関道よりの移出の場合、出口税厘每百斤 銀五十七兩二錢を徴収。
 吉林 每百斤 銀三十二兩 販売の際、錢千文につき税三十文の徴収 移出の場合、当該省の章程により徴収し、以後の徴収は免除。
 山西 每百斤 銀五十五兩 移出の場合、当該省の章程により徴

収し、以後の徴収は免除。
 浙江 每百斤 洋四十八元 移出の場合、当該省の章程により徴収し、以後の徴収は免除。
 河南 每百斤 銀三十二兩 移出の場合、当該省の章程により徴収し、以後の徴収は免除。
 黒龍江 每包五十兩につき落地税銀四錢四分 流通の際、関・卡で関税・厘金を徴収。
 雲南 每千兩 落地税銀六兩、流通の際、関・卡で関税・厘金を徴収。
 貴州 每千兩。落地税銀八兩、流通の際、関・卡で関税・厘金を徴収。
 熱河 販運過境の際に、每一斤 正耗銀二錢三分
 安徽 販運過境の際に、每十斤 銀二兩
 江西 販運過境の際に、每百斤 税厘銀四十三兩 贛関に在つては、每百斤 耗銀二兩五錢
 広東 販運過境の際に、每百斤 正税銀三十兩 他港で正税を納入したものに対しては、復進口銀十五兩
 広西 販運過境の際に、每百斤 銀十二兩
 湖北 販運過境の際に、每百斤 税耗合計銀三十四兩七錢
 直隸 落地厘每一兩 錢九文
 每百斤 價格銀二百五十兩につき 落地税二十兩
 厘捐 二十兩 関税 二十兩 以後の徴収免除
 山東 每百斤 價格銀二百五十兩につき 落地税二十兩
 厘捐 二十兩 関税 二十兩 以後の徴収免除
 福建 每畝 銀三錢八分五厘
 移入土薬每百斤 税厘銀三十五兩

陝西 平地每畝 銀一錢 山地每畝 銀六分
移入土薬每百斤 税厘銀三十五兩

湖南 未報告

台湾 未報告

甘肅 未報告

新疆 未報告

註

- (1) 拙稿「光緒初期、山西における罂粟栽培禁止問題について」『集刊東洋学』第六十二号（一九八九年十一月）参照。
- (2) 光緒元年（一八七五）に起こったマアガリー事件に端を発し、その收拾の爲の「煙台条約（芝罘条約）」締結交渉の過程で論議され、曲折に富む交渉の結果、輸入鴉片に対して関税・厘金を海関において一括納入する事により、密輸・脱税を免れるとしたが、厘金の額は「各省により情形を察勘して酌辦す」とする規定にイギリスの鴉片商人が反発し、議會に働きかけてその批准を拒否し、再度の協議が続けられ、光緒十一年に「煙台条約統増専条」が締結され、厘金の額を一律に毎百斤八十兩とし、合計百十兩を海関で徴収する事で決着を見た。この交渉経過及びその実施の過程で生じた種々の問題については、別稿で論じる予定である。
- (3) 「中英煙台統約十款」（北洋洋務局纂輯「約章成案匯覽甲編」卷二）
- (4) 「左文襄公全集」奏稿、卷五十八、『嚴禁鴉片請先增洋藥土煙稅摺摺』光緒七年五月初五日。
- (5) 「李文忠公全集」奏稿、卷四十一、『遵議鴉片厘稅事宜摺』光緒七年六月初六日。
- (6) 「劉忠誠公遺集」奏疏、卷十八、『議覆洋藥加厘辦法摺』光緒七年七月初二日。
- (7) 「張文襄公全集」卷四、奏議四、『禁種鴉片』光緒八年六月十二日。
- (8) 新村客子「中国アヘンをめぐる政策論争——署貴州巡撫李用清のアヘン生産禁止論を中心に——」『東洋史研究』第五十一卷第四号、一九九三年三月。

月）参照。

- (9) 「大清德宗實錄」光緒十二年四月甲申の条。
- (10) 羅玉東「光緒朝補救財政之方策」（『中国近代社会經濟史論集』下冊、一九七一年五月、崇文書店印行、中央研究院社会科学研究所「中国社会經濟史集刊」所収の転載）参照。
- (11) 「大清德宗實錄」光緒十六年四月甲寅の条。
- (12) 拙稿「土薬への課税の在り方とその実状——『徐州土薬章程』を中心に——」（仮題）（一九九五年五月刊行予定の「東北大東洋史論集」第六輯に發表予定）。
- (13) 「宮中檔光緒朝奏摺」（国立博物院印行、以下「宮中檔」と略称）第五輯、四四四—四四七頁。
- (14) 「皇朝政典類纂」卷九十七、征權十五に収められている光緒十七年の「總理衙門会同戶部奏」（以後「会奏」と略称）、五葉表、十五行。
- (15) 光緒十七年二月の硃批を得た署両江總督沈秉成・江蘇巡撫剛毅の徐州産土薬に関して立案した「取捐試辦章程」を指し、これが各省の土薬厘金徴収のモデルとされ、一般に「徐州土薬章程」と呼ばれた。詳細は(12)の予定稿において論ずる。
- (16) 「宮中檔」第六輯、光緒十七年八月二十二日の上奏、四六二—四六三頁。
- (17) 「宮中檔」第五輯、六〇九—六一頁。
- (18) 「会奏」、四葉裏、七行。
- (19) 「会奏」、七葉裏、四行。
- (20) 同前。
- (21) 「宮中檔」第六輯、五二四—五二五頁。
- (22) 「宮中檔」第七輯、一七〇—一七一頁。
- (23) 「張文襄公全集」卷二十九、奏議二十九、『整頓土薬稅項籌擬辦法摺』光緒十六年八月二十四日。
- (24) 「会奏」、五葉裏、一行。
- (25) 「李文忠公全集」奏稿、卷七十、『酌議土薬稅厘摺』光緒十六年十二月十七日。
- (26) 「会奏」、五葉裏、四行。

(27) 「李文忠公全集」訳署函稿、卷二十、『論土藥稅厘』光緒十七年正月二十七日。

(28) (26) に同じ。

(29) 「大清德宗實錄」光緒十六年四月甲寅の条。

(30) 「会奏」、六葉裏、十一行―七葉裏、十一行。

(一九九四年九月十一日脱稿)